



民俗資料を北上山地からの情報発信源に!

第2回民俗資料館運営委員会議行わる

このほど、9年度最後の会議を開催し資料館運営の総括を行いました。

—主な協議内容は—

- ①企画展の持ち方について
- ②資料の管理方法（収蔵庫建設、密閉薫蒸）について
- ③古文書の解読（コンピューター化、デジタル化）について
- ④民俗資料の国重要有形民俗文化財指定の取組について

そして、現在、資料の実測図、写真記録、聞き取り調査等台帳整備に向けた作業をすすめています。「将来、「自然と一体になって生きてきた先人達の暮らし」を北上山地発の情報源にしよう…」民俗資料が新たな夢を拡げています。

川井村北上山地
民俗資料館
入館者状況

	個人				団体				公用	合計	備考
	一般	学生	児童	免除	一般	学生	児童	免除			
6年度計	591	23	98	2,097	100	0	69	295	87	3,360	11月~3月
7年度計	1,970	55	265	75	1,257	0	34	269	130	4,055	
8年度計	1,188	23	230	60	791	30	12	144	0	2,478	
9年度計	769	19	91	10	582	0	0	477	34	1,982	
合計	4,518	120	684	2,730	2,730	30	115	1,185	251	11,875	

保存樹木説明板を設置しました。

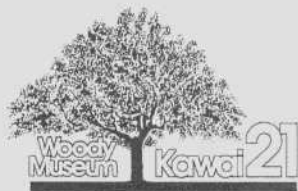
ウッディミュージアムかわい21推進事業

●事業の目的●

川井村の豊かな自然環境の象徴として、村内に自生する各種の樹木を保存育成し、後世に残すとともに、この活動を通じて自然との共生意識を醸成し、美しく、住みやすい「自然美の故郷かわい」の実現に資することを目的としています。

●事業の内容●

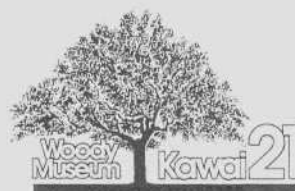
集団保存樹木、単木保存樹木を年次計画により順次看板設置、周辺整備等を、地権者や所有者のご協力をいただきながら、保護活動を行うほか、また、将来は、指定樹木マップ、指定樹木写真集発刊等を計画しています。



ウッディミュージアムかわい21推進事業
保存樹木第5号

かわい はら まん じん じや すぎ ぐん かく 川井八幡神社の杉群落

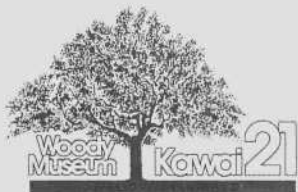
この社は、もとは川井明神と呼ばれ、閉伊七社の一つとして閉伊頼基の家臣、阿蘇権太郎重休を祀る明神社でした。神前の杉の樹木群は御神木で「明神の杉」として敬われ、宮古街道往来の目印になってきました。主木は道路埋め立てのため、根元が3m位地中に埋っており、推定の胸高周囲5m、樹高30m、樹齢およそ450年とされます。(平成9年12月建立 川井村教育委員会)



ウッディミュージアムかわい21推進事業
保存樹木第4号

かに おか だま ぐん 蟹岡滝のアカマツ群

滝水の渦巻く懸崖の岩の上に生えた3本のアカマツは、枝を滝壺に垂らし、四季折々、美しく景観を添え、このため周囲は風致保安林に指定されています。主木は胸高周囲4m60cm、樹高29m、樹齢はおおよそ400年と推定されています。(平成9年12月建立 川井村教育委員会)



ウッディミュージアムかわい21推進事業
保存樹木第6号

かわい うち はら まん じん じや けやき ぐん 川内八幡神社の欅群

この地は昔から明神平と呼ばれていて、閉伊頼基の家臣、猪狩右馬丞を祀る川内明神のあった所で、この欅群は「みようじんのけやき」と呼ばれ、神木として敬われてきました。主木は胸高の周囲4m77cm、樹高およそ29m、樹齢はおおよそ400年と推定されています。(平成9年12月建立 川井村教育委員会)



◇平成9年度の設置箇所

- 蟹岡滝のアカマツ群 (佐々木富雄氏所有地)
- 川井八幡神社の杉群落 (境内地)
- 川井八幡神社の欅群 (境内地)

◇既に設置されている箇所

- 中仁沢の杉 (小国)
- 八坂神社の楓の木 (江繋)
- 大圓寺の樹木郡 (小国)

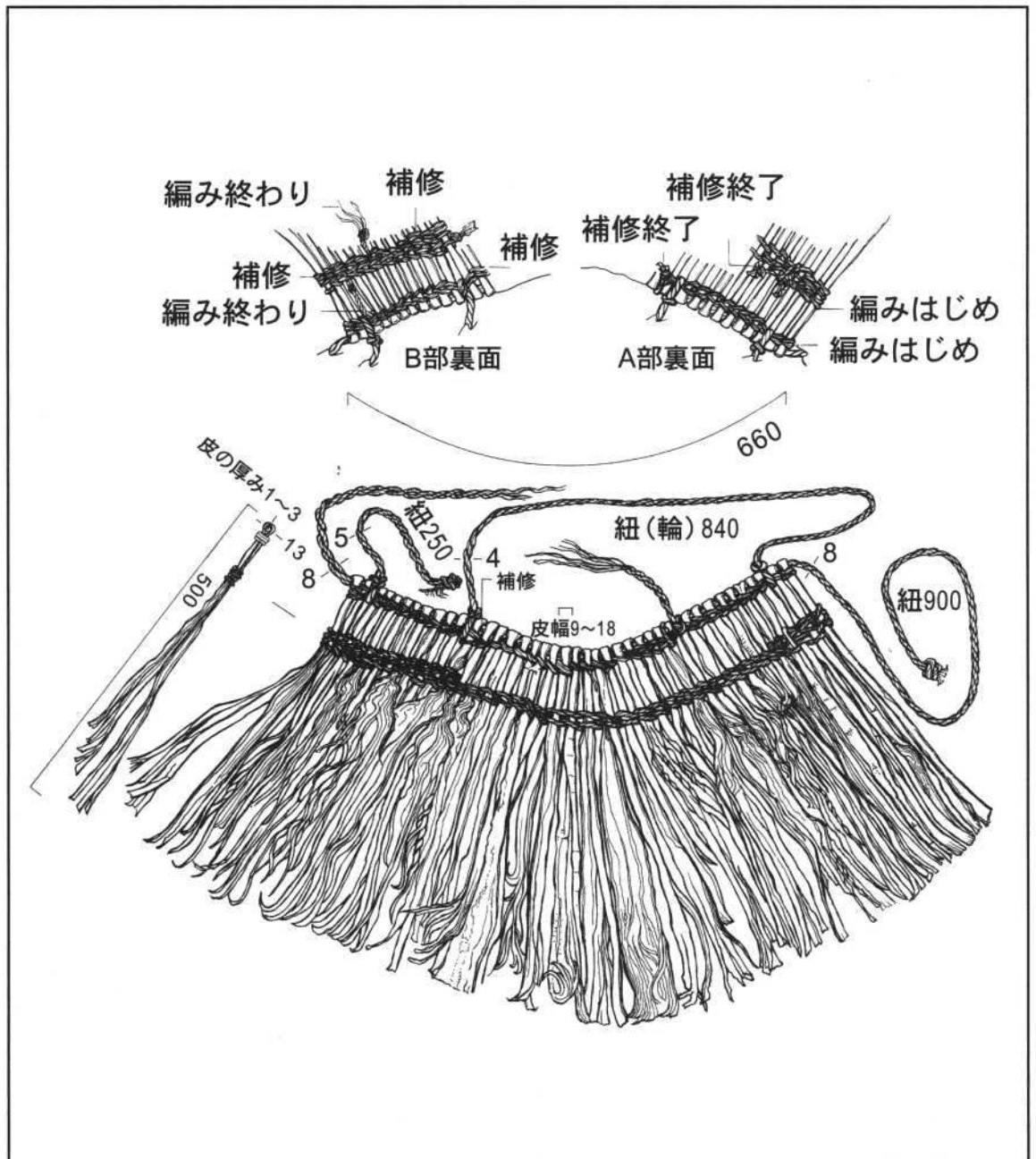
皆さんの所に

このような「もの」が

眠っていませんか？

当資料館では、村民の皆様からご寄贈頂きました大事な資料を、有形民俗文化財として育て上げ、「もの」にかかわる多くの情報とともに、未来の子供達にしつかり伝達したいと思っております。そのため日々たゆみなく資料の整理を行い、記録作業を続けております。ご寄贈頂きました方から直接お話をうかがうことを目標として作業を進めておりますが、今回取り上げました《腰みの》のように、「もの」に直接かわわってこられた方がお亡くなりになっている場合があります、残念でなりません。この資料は川井の澤口徳治様よりご寄贈頂きました。ご家族を訪ねてお話をうかがいましたが、詳細は分からないとのことでした。

そこで当館報4ページ掲載の《つかり》を御寄贈下さいました中井義雄様にうかがいましたところ、冬、雪のある時期の山仕事には欠かせない必需品であることが分かりました。雪山で袖や木挽きの仕事をする際、尻当てとして腰に着用したものだそうです。座った形で作業する場面もたくさんあるようですが、その際、尻が濡れないようにこの《腰みの》で防御したという事です。尻が濡れると言うことが、冬山でいかに危険なことかは容易に想像できます。この一枚の《腰みの》が果たした役割の大きさに驚いています。



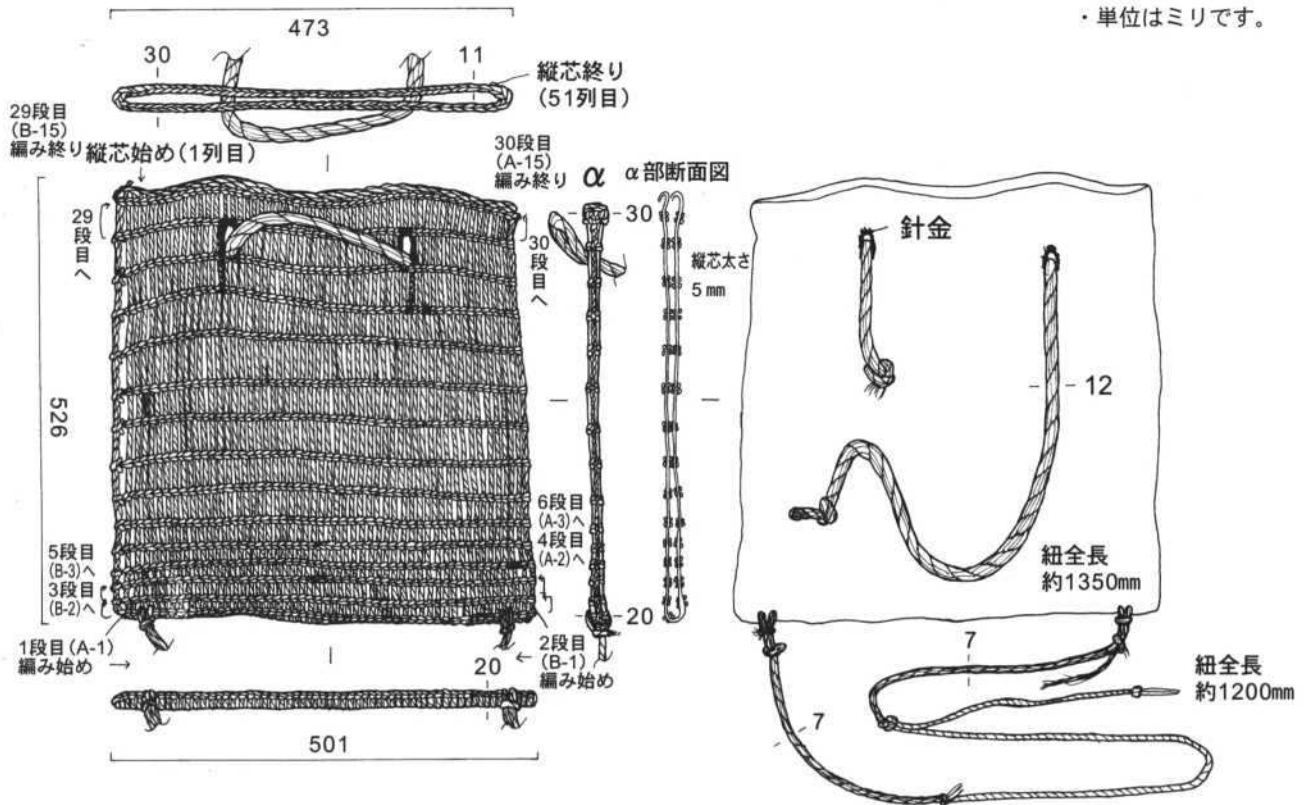
このような必需品は、どこの家にも一枚ぐらいはあったと思われませんが、資料館には一枚しかありません。この《腰みの》に限らず、皆様にとって身近なものが、現実にはほとんど失われ、使い方も分からなくなりがけています。祖先の暮らしを支えてくれた「もの」は皆大事

ですので、洩れなく「もの」や情報を収集したいと思っております。何でも構いません。いろいろなことを教えて下さい。

ご協力よろしくお願致します。

(実測作図者 名久井芳枝)

・単位はミリです。

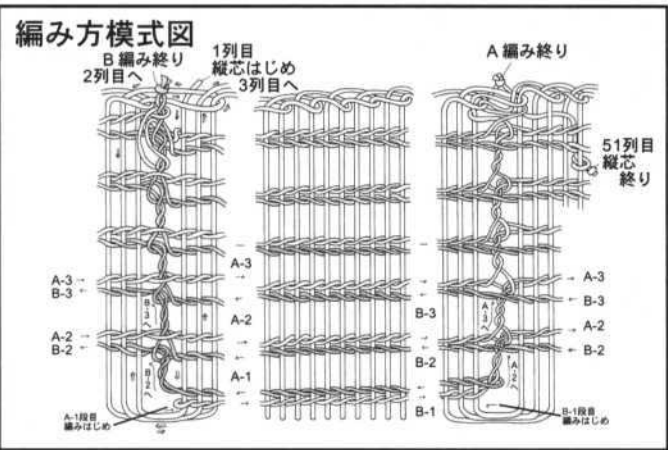


資料名 しよいつかり(背負いつかり)
旧所有者 中井義雄《1924(大正13)年生》
居住地区 江繁
製作地 自宅
製作年代 1945(昭和20)年頃
製作者 中井清之助(義雄氏の父)
材料 マダ
製作方法 マダ皮を6月頃(木が水を吸って皮のはがれやすくなる時期)に剥ぎ、川に1カ月位つけた後、乾燥して細かく裂く。それを使って縄を編った。夏、農作業ができない雨の日に作った。一つ作るには、手が混んだもので20日位かかった。

使用地 山(川井村内や遠野など)
使用年代 20年くらい使ったらしい
使用者 中井清之助
使用方法 山仕事の道具などを入れて山へ担いでいった。中には、刃広(鉞)、金くさび、ひっきりのこ、かすがい、(墨)つば、墨さし、曲がり金、弁当などを入れた。全部で15kg位の重量だった。

備考 清之助氏は、バット材を山から伐り出して売る仕事をしていた。バットには、タモなどねばりのある木が向いていたが、そんなにたくさん生えているものではないので、遠くの山まで行く事が多かった。木は、水を吸う前の堅い時期が質が良いため、旧暦の12月から翌年3月位までが山仕事の時期だった。その間は、山の湧き水のある所に小屋を作り、そこを拠点に木を伐り出した。バット材を伐り出す道具は、杣(枕木を伐り出す作業)で使用するものより小ぶりだった。マダは雨にあたって固くならないため、市販のロープなどより山仕事に向いていた。山ブドウも水を吸わなくて良いが、細かい細工をするときは不格好になるのであまり使わなかった。

作図者名 野沢裕美



この《つかり》を作った人はかなりの名人だ。継ぎ目が見えたらならない。さて、どうやって作ったのだろう。普通の《つかり》は、一枚に編んだものを折り畳んで脇を止める方法で作られる。大抵は縦芯を並べてそれを横に止めて行き、脇をかがり、縦芯は物を入れる口の部分でかがる。たまに、口から編み出して底で止めている物もあるが、基本的には同じである。

ところが、これはどう探しても縦芯に継ぎ目がない。発想を転換してみた。もともと縦芯の材が一本なのだとしたら、どうだろう。なんと、つじつまが合う。疑問が解けたと同時にまた、作った人に感心してしまった。何故こんなに面倒な作り方をしたのだろう。

この《つかり》の製作者の故中井清之助さんについて、息子の義雄さんにお話を聞いたところ、清之助さんは、絵馬を描いて神社に奉納していたほど美的センスのあった方らしい。なるほど、こだわりゆえの名品であったのか、と、なんとなく納得がいった。